

令和2年度入学 編入学（社会人）試験問題の出典

社会福祉学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	—	奥野 克巳	ありがとうもごめんなさいもいらない森の民と暮らして人類学者が考えたこと	亜紀書房, 2018年より pp.39-44	亜紀書房

令和2年度 編入学 (社会人)

社会福祉学部

小 論 文 (120分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、2ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 100 点)

私自身が、プナンのフィールドワークの初期段階で抱えていた違和感のひとつは、「プナンは日々を生きているだけで、反省のようなことをしない」というものだった。私が町で買って持ち込んだバイクを彼らに貸すと、タイヤをパンクさせても、何も言わずにそのまま返してくる。バイクのタイヤに空気を入れるポンプを貸すと、木材を運搬するトレーラーに轆かれてペチャンコになったそれを、何も言わずに返却してくる。こうした様々な体験がその違和感には含まれる。

プナンは、過失に対して謝罪もしなければ、反省もしない人たちだというのが、私の居心地の悪さに結びついていたのである。そして、この違和感、プナンでのフィールドワークを始めてから 10 年を超えた今でも、大きな謎のままである。

酒を買う金を捻出するために他人の所有物(チェーンソーの刃、銃弾、現金など)を盗む癖のあるプナンの男は、妻や家族にその振る舞いを咎められると、どうやって金を工面したのか不明ながらそれまで以上に酒を買って、泥酔するようになった。咎め立てに対するあてつけのようにも思えたが、彼はまったく反省していないように見えた。やってはいけないことをしたという自覚があるのかどうかさえも、私には分からなかった。謝罪どころか、自分のしたことを反省する素振りそのものが見当たらなかった。

プナン語には、反省するという内容にズバリ対応する言葉はない。共同体の人々は、その男が留守の間に話し合った。その場では、当の男の責任を追及することには話は及ばなかった。話し合いの参加者が、それぞれの持ちものを盗まれることがないようにつねに気をつけるようにしようではないかというのが、結論だった。

(中 略)

狩猟や漁労に出かけたり、用事で出かけたりする時、失敗や不首尾、過失について、プナンは個人に責任を求めたり、「個人的に」反省を強いるようなことをしない。失敗や不首尾は、個人の責任というより、場所や時間、道具、人材などについての共同体や集団の方向づけの問題として取り扱われることが多い。失敗や不首尾があれば、話し合いの機会を持つが、そこでは、個人の力量や努力などが問題とされることはまずない。ましてや個人の責任が追及されるようなことはなく、たいてい、長い話し合いの後に、あまり効果を期待できそうにない今後の方策が立てられるだけである。

なんとも不思議なのである。

思い立って、逆に、現代日本にこのプナンのやり方を持ち込んでみることを想像してみた。しばらく考えていて気づいたのは、我々のやり方に行き過ぎがあるのではないかということだった。営業や学業成績の不振や停滞は個人の怠慢であり、目標の未達は個人の努力不足であり、場合によっては、その「失態」は、おせっかいにも数値化されることで、反省を個人の内面へと強いるということが行われている。そのことによって、個人の悩みは深まり、生きにくさを感じるようになるのかもしれない。

個人へと責任を帰着させる時、個人は精神的にも身体的にも大きなダメージを受ける。個人の能力

や技量は独立排他的に個人のみにも帰属するものとみなされ、個人に責任が帰され、その責任が追及されるような文化は、どのようにして生み出されたのであろうか。私は、反省しないプナンの不思議なやり方を見ていて、ふとそうした思考実験をおこなうようになったのである。

そして私は、集団や共同体による目標と方向づけをメンバーがゆるやかに共有し、不首尾や失敗を、誰のせいにするのでもなく、反省もせず、次の方策へと進んでいくような、一見すると責任放棄主義のように見えるプナンのやり方を、フィールドワークをつうじて、少しだけうらやましく思うようになった。

プナン社会には、そのおかげであろうか、自死や精神的なストレスというものがない。ないと言い切れるかどうか分からないが、少なくとも、顕在化はしていない。私もプナンにならって、現代日本社会で反省しないで生きる努力をしてみたいと思ったりもする。あるいは、実はなんとも思っていないのだけれども深く反省しているように見せておくというような、裏技を使えるようにしたい、と思ったりする。

プナンは反省しない。

とにかく、そう感じられる。しかし、反省しないとは、はたしていったいどういうことなのだろうか。翻って、人が反省するとはいったいどういうことなのか。こういう問いが、解けない謎として残りつづけている。

確かなことは、プナンが、私自身がそれまでは考えてもみななかったことを、考えてみるように仕向けてくれたということである。反省しない生き方というのは、おそらくストレスがたまらない。その意味で、現代日本社会で、反省しないで暮らせたならば、なんて気が楽になるだろうかと感じられて、反省しないで生きていくことを宣言したくなる誘惑に駆られる。どうして、日本社会では反省しないで過ごすことができないのだろうか。いや、反省しないでやり過ごしていくこともできるのだろうか。そういうことをひっくるめて、プナンは、反省するという人間行動に関して、私たちに大きな問いを投げかけている。

(奥野克巳『ありがとうもごめんなさいもいらない森の民と暮らして人類学者が考えたこと』, pp.39-44, 亜紀書房, 2018年より, 一部改変)

問 1 プナン社会における失敗や不首尾、過失への対処はどのようなものか、そのメリットとデメリットも含め、160字以上 200字以内で説明しなさい。

問 2 日本社会における反省という行為が人に与える影響について、具体的な事例を挙げ、あなたの考えを 500字以上 600字以内で説明しなさい。